

ファミリー・ヒストリーを編む —Erna Brodber 作 *Nothing's Mat* (2014) を中心に—

岩瀬 由佳*

「社会学者がもし小説を書いたらどうなるのか？」という問いに対する、ある一つの答えがアーナ・ブロードバー (Erna Brodber) であるだろう。1940年、ジャマイカの中産階級家庭に生まれた彼女は、西インド諸島大学を卒業後、奨学金を得た留学先のワシントン大学医学部にて精神医学人類学を学んだエリート社会学者である。第1作目の小説、『ジェーンとルイーザがもうすぐ帰ってくる』 (*Jane and Louisa Will Soon Come Home* 1980) を出版以後、英語圏カリブ海地域を代表する女性作家のひとりとしてその地位を確固たるものにするまでに、彼女は公務員、大学教員、社会経済研究所の研究者といったキャリアをたどり、実際に『ジャマイカにおける児童放棄』 (*Abandonment of Children in Jamaica* 1974)、『カリブ女性に関する認識』 (*Perceptions of Caribbean Woman* 1982) といった社会学的研究書も複数著している。1975年から約8年間にわたるジャマイカでの研究員時代の経験、特に、地元で古くから伝わる民間伝承や民話を老人たちから聞き取るフィールドワーク作業¹が、その後の彼女の作品に多大なる影響を与えてきたのは明らかである。アフリカ系カリビアンをめぐる抑圧支配の歴史を自分たちの視点から、自分たちの言葉で書き換えようという果敢な試みに加え、奴隷制、植民地主義の時代を生き抜いてきた祖先たちと現在を繋ぎ、アフリカ系ディアスポラとしての矜持を高めながら、次世代へとその自負を語り継ごうとする、そのナラティブの力強さは彼女の作品に一貫するところであり、1984年に彼女の生まれ故郷であるジャマイカ・ウッドサイドで自ら立ち上げたアフリカ系ディアスポラ研究組織「ブラック・スペース」の草の根運動とも繋がるものである。

「アーナ・ブロードバーの妥協のない小説は、ディアスポラの歴史、記憶、そしてアイデンティティの撚り糸を、知る必要があることと同様に、行動する必要があることに呼応する新しい啓発的な表現形式に織り込む」というウィンダム・キャンベル文学賞 (2017年) 受賞の際に、ブロードバーに対して贈られた言葉が、彼女の作品に織り込まれた世界観を端的に示唆していると考えられるが、本稿は、ブロードバーの最新作である『ナッシングのマット』 (*Nothing's Mat* 2014) に焦点を当て、ジャマイカにルーツをもつ、ある不可思議なアフリカ系ディアスポラのファミリー・ヒストリーにみ

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学社会学部

る彼女独自の歴史観と、ポストコロニアルの現代から照射する植民地主義に対する彼女の創造的な文学的アプローチの手法について読み解く。

1. 家系図に収まらない「家族」のかたち

「あなたの終わりはあなたの始まり」(14)というこの謎めいた言葉が、本作品の全てを暗示しているといっても過言ではないだろう。これは、作品の主要な語り手である「私」、作品後半になってはじめて夫からプリンセス (Princess) と呼ばれ、名前が明らかにされる語り手の親戚、ナッシング (Nothing / Conut) が発した言葉である。どの家族にも何かしらの秘密があるように、このナッシングも家族の中で語られることなく、長年排除されてきた存在である。イギリスに生まれ育った十代の少女である「私」が、大学進学を控え、高校卒業資格を得るための A レベルテストの最終論文を完成させるために、父方のルーツを求めてジャマイカの親族たちを訪れた際に出会ったのがナッシングだ。八十代の祖父母から一族のファミリー・ヒストリーを聞き取り、資料をまとめ、社会学の論文を書き上げる過程で、次々と明らかになる複雑怪奇な家族関係の中心にいるのが、ナッシングであり、その簡単に説明し難い家族関係を示し得るのが「ナッシングのマット」なのである。

「私の提示の仕方では、普通の家系図に見られるような直線や矢印を使わなかった。私はナッシングのマットにあるような円を用いたのだ」(36)と語るように、「私」は、一般的な家系図の代わりに、ナッシングとともに自ら野で採取したサイザル麻から糸を紡ぎ、撚り合わせてぐるぐると渦巻き状の円形に編み上げ、そのいくつもの円を縫い合わせて一枚の敷物を作り上げたように、ひとつの円が一人の人間とその人生を表し、それらの円形の環が絶妙なバランスで繋がりが合うことによって新たな模様を生み出し、美しい綾をなす様をイメージした彼女独自の家系図を論文課題の中で提示したのだ。ナッシングの語るファミリー・ヒストリーに耳を傾けながら、夜毎、サイザル麻のマットを編み上げていく作業を通じて、「私」は決意するのだ。「家族のマットのように見える、私たちが作っている決して終わることのないその円環に焦点を当てることに私は決めた」(14)と。

取り組んでいた「社会学」の最終論文に合格し、「私」はその講評コメントを次のように省みる。

私はレポートで A の成績が取れたし、「反復」(iteration) と「回帰」(recursion) という二つの新しい言葉を学んだ。その二つが意味していることをその時はわかっていたとは思えないけれど、先生は、その二つが、私がマットを作る際に用いた原理なのだと。「あなたの終わりはあなたの始まり」と先生はナッシングの言葉を引用して、微笑んだ。「辺鄙な場所には先人の知恵があるものよ」と先生は付け加えた。「論文は、この西インド諸島の家族を「慣例を無視した無茶苦茶なかたち」(fractured) として論じている」けれど、フラクタル (fractal: どんなに微小な部分を取っても全体に相似しているような図形) というのが、論文の最後に書かれた本当のコメントであることをあなたなら証明できるかもしれないわ。私は、このコメントが肯定的なものであることがわかっていたし、そのコメントが私の腑に落ちなかったという事実に、私が引き留め

られることもなかった。(36)

まだ十代後半の「私」には、この教師の意味深長なコメントを十分に理解する余地はないが、「反復」と「回帰」というコメントに含まれていた二つの言葉は、渦巻き状に編み込まれた円形がいくつも連なるサイザル麻のマットを想起させる。もともと愛情や血縁関係があったわけではなく、奇妙な運命によって家族関係を結ぶことになった一族の者たちは、一見するとバラバラで、一般的な意味合いとは異なる家族のかたちを示している。しかしながら、その一人一人の人生を垣間見ると、多少の違いはあっても植民地主義支配によってその人生を翻弄され、肌の色合いや性別、階級社会の理不尽さによる差別的な境遇の中で生き抜くことを余儀なくされるという相似性を帯びている。それは、「黒い積荷」、奴隷としてアフリカ大陸から中間航路を経て世界各地へ運ばれ、アフリカ系ディアスポラとして散在する者たちに共通する苦闘の系譜でもある。

そして、「私」自身も父の故郷、ジャマイカに「回帰」するのである。「私」の父ハーバート (Herbert) や叔母ポリリー (Polly) は、その才能を花開かせるためにイギリスへ渡ったが、²イギリス生まれの「私」は、父親らがたどったジャマイカからイギリスへという軌道を逆に辿り、ジャマイカに根付くことになる。ロンドン大学のジャマイカ分校に進学することを皮切りに、ナッシングの残したジャマイカの邸宅や土地を相続し、研究を深めながら、結婚し、子供を産み育てる。それは、論文コメントに記された「反復」と「回帰」という予言めいた言葉に沿うものであり、「フラクタル」と評されたアフリカ系ディアスポラのファミリー・ヒストリーの探求を不可思議な力を秘めた「ナッシングのマット」の中に見出そうとする試みでもある。

ブロードバーは、本作の出版記念講演において、「それは個人的なファミリー・ヒストリーに深く関わるもの」(The Gleaner 1) であると語り、もともと実姉であるヴェルマ・ポラード (Velma Polard) の家にあったマットをイメージしていたこともあり、実際に本作の表紙にそのマットの写真を使用したのだという内輪話を披露している。「ナッシングは私を自分のファミリー・アーカイブの中に連れて行ってくれる」(1) とブロードバー自身が述べるように、フィクションでありながら、本作に彼女自身の個人的なファミリー・ヒストリーの要素があるのは確かであろう。「この作品の中で、私はナッシングを再構築しようとしたの」(1) というブロードバーの言葉からもそれは明らかである。ただそれは、西欧アカデミズムが重要視する緻密なデータやアーカイブに依拠した事実のみを追い求める手法ではない。「マットの形状を通じて、この小説は、帰納的思考を尊び、血縁を超えたケアと繋がりを強調し、カリブの人々の歴史と未来の両方に対して彼女独自の方法で応じる、つまりフラクタルな家系図を支持し、推定上、中立で、表面上、同一性の事実に基づいた記録文書というヘゲモニックな家系図を拒否しているのだ」(2) というレイチェル・モーディカイ (Rachel L. Mordecai) の指摘は非常に鋭いように思われる。中立性や客観性、科学的な根拠を重要視するのではなく、時にはリサーチ対象の人物に感情的に寄り添い、帰納的思考を用いて、個々の特殊性から普遍性を導き出すような手法をブロードバーは本作品で試みていると考えられる。この手法は、ブロード

バーの他作品、特に『ルイジアナ』(*Louisiana* 1994)でも使用されており、主人公の女性が文化人類学者であるという点、イギリスとアメリカという場所の違いはあっても、ジャマイカとアフリカ系ディアスポラが共通の歴史認識とともに、精神的に繋がり得る余地を探し求めるというテーマ設定には類似性がある。「『客観性』に専心する社会科学の方法論には飽き飽きしてしまって」(165)と述べるブロードバーではあるが、「科学的手順における小説」(“Fiction in the Scientific Procedure” 1990)のなかで、「私はまだ自分のことを社会学者だと思っていて、小説を書くということが社会学的な方法論の一部であると考えている」(164)としている。矛盾しているようだが、彼女によれば、「客観性」や「中立性」に囚われることにより「人々と研究者には距離ができ、研究者と研究対象者間の感情的な相互関係を拒絶する」(165)状況に陥る。そこでブロードバーは、一般的な西欧アカデミズムの方法論を越えたアプローチ方法として「小説」という表現方式を用いているのだ。「ジャマイカ社会を私が調査するには、公平無私の学者たちとコミュニケーションする客観的な外部からやって来た研究者の観点から書くことができないと感じていた。私は、自ら『私』を組み込まなければならなかった」(166)とブロードバーが述べるように、研究対象者たちをより深く理解するために人々の間に入り込み、時には感情的に接しながら、主観や推論を交えて核心に迫っていく手法を取って「小説」の中に見出していると考えられる。自らそれを「小説と科学の結合」(167)と呼んでいるが、その根底には、「(作品の中で描かれる)情報が、黒人たちと、特に黒人ディアスポラたちがより密接に結束する手段となれば、そうすることによって連帯し、世界の他の人々にもっと自信を持って対峙できるようになればという願い」(164)がある。

確かに、自らの作品がアフリカ系ディアスポラの連帯意識のきっかけとなれば、また、互いに共有し合う先人たちの歴史的経験と苦難の日々を共に再認識し、アフリカ系ディアスポラとしての自尊心を得ることに寄与できればという願いが彼女の作品に託されているのは明らかであろう。しかしその一方で、彼女の作品の難解さが問題となる。小説と科学的な側面が融合していることもその理由にはあるが、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) やウィルソン・ハリス (Wilson Harris) の作風との類似性をしばしば指摘されるように、ブロードバーの作品は難解であることで悪名高い。一読しただけでは、なかなか理解し得ない難しさがある。ポリフォニックな語り、時系列を無視したストーリー構成、突如顔を出すフォークロアのキャラクターたち、ジャマイカン・クレオールの人々のナラティブ。おおよそ一般大衆向けではない作品の数々であるが、本作に限って言えば、比較的、理解がしやすいカテゴリーに該当するといえるだろう。自分は何者なのか、という問いに対して、「知的労働者 (intellectual worker)」(168) がじっくりくるとブロードバーは述べているが、彼女には「エリート主義」的な物の見方が非常に強い。それは、作品にも色濃く反映されており、どの作品においても一段高いところから物事を描く傾向がある。そのため、作品が読者を限定してしまうのではないかという懸念も否めない。主人公もエリート女性が多く、本作の主要な語り手である「私」も西欧アカデミズムからはなかなか理解されぬまま、独自の研究を続けることを余儀なくされた、メインストリームからは離れた大学講師の設定である。直線や矢印によって誰しもが一目で理解できるような家系図ではな

く、円環の連なりで形作られたマットに表象される、フラクタルな彼女のファミリー・ヒストリーをブロードバーはいかに描くのか、その細部について次に分析する。

2. ナッシングからはじまるファミリー・ヒストリー

(1) ナッシングを取り巻く人々

ナッシング (Nothing)、「何も無い」という奇妙な名が示すように、ナッシングは、一族の中では秘された存在である。不都合な存在なのだ。語り手である「私」から家系図をたどれば、父方の祖母パール (Pearl) と姉妹のように育ったという関係性であり、直接的な血縁関係はない。実のところ、幼く、無知で純真な少女クラリセ (Clarise) が、隣に住んでいた中年男性ユースタス (Mass Eustace) に犯された末に生まれたのが、ナッシングである。妊娠していることにも気づかず、トイレで産み落とされたナッシングであるが、クラリセが姉のモード (Miss Maud) から「どうかしたのか?」と問われ、「何でも無いわ」(17) と答えたことに由来して、その名がつけられた。誕生当初、ナッシングは私生児として育てられ、本来なら「存在すべきでは無い存在」なのであるが、ナッシングから不可思議なファミリー・ヒストリーの輪が広がっていくことになる。何も無いところから、円環が一つ一つ生まれ、繋がり始めるのだ。言い換えるならば、それまで存在していたのだが、隠蔽されてきた関係性がナッシングのナラティヴを聞き取り、それを語り継ごうとする「私」の存在によって、初めて明るみになるのである。ナッシングの存在は、次第に周囲に変化をもたらし始める。

隣に住むユースタスは、赤ん坊のナッシングの顔立ちに亡き母の面差しを感じ取り、密かに見守り始める。そんな時にクラリセが肺病にかかり、急遽、隔離する必要ができたため、モードとナッシングはユースタスの家に間借りし、一緒に住み始めることになるのだ。クラリセは間もなく亡くなり、そのまま奇妙な3人の共同生活が続くことになるが、結果的にナッシングは、ユースタスの養女となり、母代わりのモードはユースタスの妻となる。「ナッシングは今や本当の家族ができた」(23) と語られるように、バラバラだったそれぞれのピースが組み合わさるかのようになり、ナッシングを中心に新たな「家族」のかたちが誕生するのだ。

さらに、モードとクラリセが本当の姉妹ではないことも第二部の6章で明らかになる。時は、1865年に遡り、モラント・ベイの反乱 (Morant Bay Rebellion) の前後が描かれる。モードは当時16歳であり、クラリセは7歳の少女であった。モラント・ベイの反乱は、ジャマイカ事件ともいわれる黒人たちによる反乱・暴動事件であり、その後のイギリスの植民地支配に多大な影響を与えたとされる歴史的事件である。1834年に実施された奴隷解放令により、黒人たちは奴隷の身分から解放されたものの、引き続きその境遇は厳しいものであり、高所得者に限定された選挙権や天災による不作は、黒人たちの不満を一層高めることになった。デモ行進に参加する黒人たちと白人支配者との小競り合いが発端となり、大規模な暴動事件へとエスカレートすることとなったのだ。これにより、多数の黒人たちが男女、年齢を問わず、制圧軍により虐殺されることになったのである。³モードの恋人であったモディブ (Modibe) は、最初の小競り合いの際に、彼女の目前で白人たちに殺害されてしまう。

さらに追い討ちをかけるように、モディブの棺の目の前でモードは白人たちに次々と凌辱される悲劇に陥る。モディブの妹であるクラリセとモードは、周囲の勧めにより、危険をかいくぐりながら二人だけで遠い、見知らぬ土地へと逃げ延びることに成功するのだ。親族を誰一人残らず殺害され、取り残された二人はひっそりと田畑を耕しながら、名を変え、「姉妹」として生きることを選択する。モードのジャマイカン・クレオールの人ラティヴによって淡々と語られるこの章は、ジャマイカの被植民者の視点から描かれた反乱の顛末であり、奴隷解放以後であっても、いかに被植民者、特に被植民者の女性の存在が植民地社会の中で軽視されていたのかということが明らかになるが、そのような中であっても男性に依存することなく、逞しく自分の手で人生を切り開き、クラリセとその娘のナッシングを守り育てるモードの姿は、「聡明な働き者」(31)、「大柄でがっしりした女」(22)、「恐ろしい女」(67)と評されるように、男性をも凌ぐ不屈の精神力が備っている。

本作における、もう一人の「男勝りの女」が、パナマ出身のユースタスの双子の姉、ユーフィーミア (Euphemia) である。「向こうの男たちは、ミス・フィー (ユーフィーミア) を支配することができなかった。彼らは、彼女を男のような女と呼んだ。彼女はどの男たちよりも上手にボートを操ることができた」(30)と評されるように、彼女は誰よりも「ハンサム」(30)な女だった。彼女の類い稀なその行動力と商才に誰も勝てるものがいなかったのだ。ボートでヤム芋の量り売りの仕事をしてきたが、自分たちの洋服の洗濯に難儀する男たちに着目し、洗濯業を立ち上げて、たちまち財を成すに至ったのである。女傑とも言えるそのユーフィーミアは、50歳目前の弟ユースタスにナッシングを養女にするように勧め、たくさんのアメリカ製の洋服をナッシングに贈るような気遣いをみせたが、一番のナッシングへのギフトは、後にナッシングと姉妹のように育つことになる、ユーフィーミアの妹の娘、パール (Pearl) をユースタスの家へ連れて来たことだろう。

このパールは、語り手である「私」の父方の祖母にあたる人物である。「ミス・フィーは何も生み出さなかった、ミス・モードは何も生み出さなかったし、ナッシングも何も生み出さなかった」(32)と語られるように、ユーフィーミアとモード、ナッシングは、男勝りに仕事をする一方で、子を成すことがなかった。しかしながらパールは、「スタイリッシュ」(34)、かつ自由な女性で、「この世は彼女の思うがまま」(31)と語られるように、アメリカ人男性と恋に落ち、二人の子供を儲ける。その関係が破綻すると、子供を相手に預け、ナッシングの家へやって来たのだ。彼女はナッシングの農園で栽培するココナッツとサトウキビを全て買い取り、それを原料にココナッツオイルと砂糖、ウイスキーを製造するようになる。パールのビジネスは評判を呼ぶようになるが、経理上の問題をサポートし始めたのが、クラリセの幼馴染であり、かつての村の秀才で、今や村の学校の校長を務めるネヴィル (Neville) である。ネヴィルは、その安定した地位を求める数多くの女性たちから誘惑され続けるが、自由に旅をし、世界事情を語り、男性の稼ぎをあてにせずに生きるパールに魅力を感じ、結婚することになる。二人の間に生まれたのが、語り手の「私」の父であり、叔母のポーリーなのだ。

ナッシングを中心にして、それまで全く関係のなかった人々が互いに引きつけ合い、結びつくこと

によって、擬似家族的な関係性から新たな「家族」のかたちが生まれる。それらは、血筋や正当性を表す直線的な権威付けのための家系図で示すことができないが、緩やかに、しかしながらしっかりと繋がりがあつた関係性である。それを構成する上で重要な役割を担っているのは、男たちを蹴散らすほどの不屈の精神力と経済力を持つ「強い女たち」である。彼女たちは、ナッシングをケアし、サポートしていくが、ナッシング自身も経済力を兼ね備えた「強い女」に成長していくことになるのだ。

(2) ナッシングをめぐる男たち

ユースタスから「かわいい子、お前は羽のように軽いね。皆がお前を『ナッシング (Nothing)』と呼ぶのも不思議はないね」(22) とからかわれるほど、幼少時のナッシングは小さく華奢な少女だった。そんな彼女も生涯二度の結婚を経験することになる。一人目の夫は、エヴェラード・ターンベリー (Everard Turnbury) である。彼については、第一部の4章と第二部の8章で描かれるが、前者は、ナッシングのナラティヴに基づく「私」の語りであり、後者は、エヴェラード自身の語りとともに、最後に「私」の調査と推論を交えた帰納的思考法による語りで構成されている。興味深いのは、同じ出来事を語るにしても、語る者の視点によって差異が生じることになり、何が真実であり、何が正しいのかといった判断が難しくなる反面、異なる視点からの語りや物事をより立体的に、陰影に満ちた深みをもたせる効果を生み出している点である。また同時に、この二つの異なる視点からの語りそこから生じるズレは、西欧アカデミズムを信奉する研究者による結論が、客観性や論理性に裏打ちされたと言われる理由のみで果たして本当に「真実」だと言い切ることができるのか、という問いかけを投げかける。更にいうならば、8章のリサーチ結果と類推を交えた「私」の推論が、価値のないものとして一刀両断に切り捨てられないのではないのか、といったプロットバーの意図もそこには透けて読み取れるのだ。いずれにしても、この二つの語りを絶妙なバランス感覚で作品に組み込んだことにより、単に批判一辺倒では片付けられない、植民地主義の生み出した闇の深さを読者は目の当たりにすることになる。

ナッシングの最初の夫、エヴェラード自身も植民地主義が生み出した悲劇の一端と言えるかもしれない。彼の母、ドリス・スミス (Doris Smith) は、イギリス出身の白人治安判事の父、キャプテン・スミス (Captain Smith) と元奴隷の黒人の母の間に生まれた娘である。植民地においてムラート (白人と黒人の混血児) は決して珍しい存在ではないが、植民地政府の要職にある白人男性が愛人ではなく、黒人女性を正式に妻として迎えることは当時としてはかなり稀なことであった。というのも「ジャマイカにある罪は、人種と肌の色の差別であり、それに伴う黒人女性の搾取である」(69-70) という牧師の言葉が示すように、肌の色合いとその人物の社会的階級が密接に結びついたカラーカースト制⁴が根強い植民地社会において、その末端にいる黒人女性が階級トップにいる白人イギリス人男性の妻の座を占めるということは異例なことである。ドリスの兄弟は、弁護士や教師、会計士といった専門職につき、独立することができたが、問題はドリスの将来であった。ムラートである彼女に相応な結婚相手を見つけることが非常に困難であったからだ。心配した彼女の父親が見つけ出したの

が、エヴェラードの父、サミュエル (Samuel) だったのだ。サミュエルは広大な土地と立派な屋敷を所有しているが、それはかつての栄光であり、没落した元大農園主に他ならない。要するに、ドリスの持参金がサミュエルとの結婚を可能にしたのである。しかし、「その家族は異常であった」(25)と語られるように、現実から逃避するかのように、ドリスの持参金で日々酒浸りの生活続けるサミュエルと、貧困の中でエヴェラードをはじめとする六人の子供たちを産み育てることだけで繋がり得るドリスの家族関係は、行き場がないほどに破滅的であった。周囲の黒人たちからも蔑まれるほどの凋落ぶり、エヴェラードも「レッド・イボ (Red Ibo: 赤い肌の少年という意味)」(61)と自分を呼ぶ人々の嘲りの中に、強い劣等感を見いだすことになる。そんな生活からの転機になったのが、母ドリスの死だ。七人目の出産で苦しみがきながら一人で亡くなっていった母の死を境に、見かねた母方の祖母が子供達を引き取ってくれたのだ。そこで初めて経験することになる、規則正しい普通の生活、学校や教会に行く経験は、それまで両親と薄暗い屋敷内だけが知る全てだったエヴェラードの世界を押し広げることになり、彼の商才が発揮される機会を生み出した。

商業用のバナナを育てるビジネスを巡ってエヴェラードが最初のクライアントとして知り合ったのが、ナッシングの父であるユースタスである。「働き者で、横柄でもなく頑固でもない」(67)と評されるユースタスは、パナマからジャマイカに移住してきた人物であり、白人、黒人、そしてインド系と様々な人種、階級の人々との付き合いがあったため、エヴェラードにとって絶好のビジネス・パートナーだったのだ。ユースタスの土地を借り、エヴェラードが自らバナナを植えて収穫し、販売する代わりに、利益の一部を受け取るという契約を履行し、彼らのビジネスモデルは大成功を収めることになる。すぐに村全体にもそれが普及し、豊かになることによって、人々の多くが中産階級的生活を謳歌するに至るのだ。

エヴェラードが、密やかに「少女 (ナッシング) を通じて (ユースタス) 一家の一員になれば、全てを手に行ける」(68)と彼女の財産狙いで結婚を画策するようになっていた矢先、ユースタスが突然、不審の死を遂げる。4章では、ナッシングとの結婚はエヴェラードから申し出たことになっているが、8章では、モードが結婚を言い出し、それをエヴェラードが承諾したという違いがみられるが、ナッシングは結婚したものの、エヴェラードとの夫婦関係を拒み続け、弟の不自然な死に、実はエヴェラードが関わっているのではないかという不信感を持ったユーフィーミアが婚姻関係の無効を裁判に訴え出ると、彼は、突然、姿を消してしまう。その結果、ユースタスの財産を引き継いだナッシングは、十代でありながら非常に裕福な女性になったのだ。

しかし8章において、彼が姿を消したのは、逃げ出したのではなく、全く違う理由であることがエヴェラード自身によって語られる。彼は、ユースタスの死に関与しておらず、ナッシングに対する罪の意識に苛まされたために姿を消したのだというのが、彼の語る本当の理由である。もちろん彼女がユースタスの跡継ぎであり、彼女の引き継ぐ財産も魅力的ではあったが、彼女に惹かれた本当の理由は、自分の母親が学校で学んだと耳にしていた物事、例えば、ジャムやゼリーを作ったり、刺繍をしたり、というようなことを全てナッシングができたからである。しかしそれは同時に、彼に相反する

感情をも湧き上がらせたのである。良家に生まれたムラトリーの母が、学んだのにもかかわらず、嫁ぎ先の貧しさのためにそれを実践する機会さえなかったのに対し、黒人のナッシングは今、自由にそれを楽しめる。その事実を憤りを覚えたエヴェラードは、母のために、彼女を犯したいと考えていたのだ。彼の歪んだ欲望の中には、植民地社会に根深く残る、カラーカーストによる差別意識が潜んでいる。そんな彼の中にある悪意を知ってか知らずか、ナッシングは彼を拒み続け、二人の猛女も彼女を守り抜いたのである。彼は、自分の父親が酒に溺れたのも、持参金目当てでムラトリーの母親と不本意な結婚をした後ろめたさに原因があると感じており、現在の自分の境遇、つまり、財産目的でナッシングと結婚し、一人の黒人女性を抑圧しようとしている自分の行為は、父親が母親にしていたことと全く同じではないか、と罪の意識を持ちはじめたのだ。彼は、信仰に救いを求め、ナッシングの元を去ったのである。

先にも述べたように、同じ事柄が、二つの異なる視点から語られるため、どちらが真実なのかを安易に判断することは難しい。ブロードバーは8章の最後に、さらに調査を重ねた「私」の語りを挟み込むことによって、独自のまた異なった見解を提示する試みをする。いわゆる、ブロードバーのいう「小説と科学の結合」(67)の実践である。教会の洗礼証明書を見つけ出した「私」によれば、エヴェラードの父親が「サミュエル」であり、イギリス生まれであることが判明する。また、サミュエルの父親とされるオールストン・ターンベリー (Alston Turnbury) の洗礼書からも、彼がイギリス生まれであることがわかるが、奇妙なことに、二人の年齢差が12歳しかないことに着目する。ここで、その二人は「おそらく、父親と息子の関係ではない」(71)と「私」は判断するのだ。丹念な古文書調査と推論を重ねた「私」は、一つの仮説を導き出す。実は、十代のオールストンと子供のサミュエルがイギリスで誘拐されたのちに船でジャマイカに運び込まれたのではないか、という仮説だ。当時、黒人奴隷の人身売買だけではなく、イギリス人の子供に関しても実際にそういった犯罪行為が行われていた記録があるのだ。もともとターンベリー少佐のものであった400エーカーの土地から20エーカーの区画が、オールストンとサミュエルに贈与された記録が残っているが、少佐に妻がいた形跡も、何かしらの社交クラブやイベントに参加した記録もなく、少佐が完全なる「世捨て人」(72)だった可能性に行き着く。そこから少佐が「男色家」だったのではないか、つまり、「この二人の若い男性は、イギリスで捕らえられてジャマイカに運び込まれ、少佐の慰みモノになり、その報酬に土地を与えられたのだ」(72)という推論を打ち立てたのだ。エヴェラード一家が周囲の黒人たちから好奇の目に晒され、距離を置かれていたのもそういった事実を人々が知っていたためではないのか、そのためにサミュエルは酒浸りになり、人生を破滅させていったのではないか、という結論を「私」は引き出すことになる。

もちろん、「私」のこの結論が真実であるという決定的な証拠はない。しかしながら、二つの異なる視点からの語りとそれに基づき、学術的調査と推論を重ねて出した結論といった、多層な見解を交錯させ、多角的な側面から物事を解釈することにより、植民地支配の暗部をより一層深く露呈させることになるのは確かであろう。黒人や女性、そして混血児、白人の子供に至るまで、植民地主義のあ

る意味、犠牲者であり、搾取の対象になり得たことを示唆している。

エヴェラードが去った後、ネヴィルの紹介のよって、ナッシングはテオ (Theo) と幸せな再婚をする。彼は、「自分や他の男たちのように農地で懸命に、そして能率的に働くナッシングの能力に魅了された」(35) のだ。

(3) ナッシングと不可思議な仲間たち

ナッシングのファミリー・ヒストリーには、不可思議な出来事、奇想天外な仲間たちの存在が欠かせない。その一例が、ミスター・キース (Mr. Keith) であろう。キースは、人間から生まれた「巨大なタロイモ」(10) である。ナッシングがタロイモを食べられない理由も、彼女にとってタロイモを食べるということは、キースを食べることであり、キースは彼女の大切な家族の一員なのだ。この始まりは、ユースタスが畑のタロイモを盗んだ者にはタロイモの赤ん坊 (dasheen baby) が生まれる、という呪いをかけたために、畑のタロイモをたまたま盗んだミス・アイリーン (Miss Aileen) と恋人の間にキースが生まれることになったのだ。関わりたくない男は逃げてしまい、取り残されたアイリーンとキースを世話することになったのが、ユースタスだ。もし村人に見つかれば、悪魔の作業だとしてキースを切り刻み、豚の餌にされてしまうことを恐れて、人目からはなれた茂みの中に小屋を建て、二人を長年、匿ってきたのだ。ユースタスも、アイリーンも亡くなり、「今、私は死ねないわ。だって誰かがキースのことを捕まえてしまうでしょう？」(12) とナッシングは涙ながらに語るのである。その語りの最中にも、話すことのできないキースは、美しい歌声を聞かせてくれる。もちろん、「私」は、この人間のような風貌をして、横縞ストライプシャツを着た巨大なタロイモ、キースを目の前にしても、ナッシングが語る話をにわかには信じられないが、一族の不都合な秘密を知ることによって、フラクタルなファミリー・ヒストリーの世界に足を踏み入れることになるのである。

このプロットバーが描き出す超自然的な世界は、現実と幻想が混濁したマジック・リアリズム的世界観であると言えるだろう。ガブリエル・ガルシア＝マルケス (Gabriel García Márquez) らに代表されるラテン・アメリカ、カリブ海地域出身の作家たちによく見られる小説手法であるが、単なる小説の表現手法という訳ではなく、虚と実が交錯し、日常の中に潜む非日常のような、呪術や迷信、そして神秘的な世界と現実世界が混在かつ融合しているかのような世界観は、カリブ海地域の出身者にとって、ごく身近な世界観であると考えられる。ジャマイカ出身のオリブ・シーニアー (Olive Senior) は、インタビューで次のように語っている。「マジック・リアリズムは、我々の日々の生活とそれほどかけ離れていないところにある非日常生活、つまり、あなたがそれをなんと呼ぼうとも、不可思議で超自然的なものと日常の生活を私たちが芸術的に結び合わせることを可能にするので、我々の社会にととても見合った形式であると思っています。私にとって、書くこと [/] 文学は、不可思議な力と密接に結びついているのです。」(484) こういった考え方は、シーニアーに限ったことではなく、ハイチ出身のエドウィージ・ダンティカ (Edwidge Danticat) も「人がマジック・リアリズムのことを『信じがたい』と口にする、カリブからやってきた私たちの多くは、驚いてしまうのです」

と語り、「私たちの世界観にとって、大好きなガブリエル・ガルシア＝マルケスの世界観のように、マジック・リアリズムと考えられる多くのものが、私たちにとって、超自然的というよりもっと現実的なものに見えるのです」としている。それは、ブロードバーも同様であり、日常の現実世界に潜む超自然的な存在、土着的な精神世界との共存をナッシングの母、クラリセの語りで描きだしている。「あの殺し屋たちは、私の父さんや兄さんの遺体をどこかに持って行ってしまったのは知っているけど、私は、魂が他の人の身体の中に入っていけることも知っているわ。私の父さんと兄さんの魂は強いから、他の人の身体の中に入ることができることも知っているの。だから私は男の人をじっと見てしまうの。私の父さんと兄さんの魂がどの人に入っているのかと確かめるために」(54) というクラリセの語りの中には、「死後の人間の魂が、生きている人間の身体に入り込み、ずっと見守っていてくれる」というカリブ海地域特有の土着的な死生観を明示している。自らの死に際しても、「私は死んでも構わないわ。だって私はモディブ（兄）や父さんと一緒に居られるのだし。でも誰の身体の中に私の魂は入り込むのかしら。我が子の中に入って思っていたのだけれども」(58) と語るように、あの世とこの世が繋がり、それを行き来する不死の魂の力を信じていることがわかる。最後に「私もしナッシングを産まなかったら、私は『ギャル（クラリセの愛称）』以外の何者でもなかったわ」(59) とクラリセは語り、「ナッシングが、あるいは私が、好もうとそうでなかりうと、私は天使になるのだから、今ではどうでもいいの」(59) と結ぶ。この「天使」という言葉への言及もカリブ海地域に特徴的な土着的宗教観とキリスト教的宗教観の混淆を指し示すものであり、カリブ海地域の精神世界を垣間見せるものである。死してなお、彼らは家族と繋がり続けるのである。

このほかにも、マジック・リアリズム的手法として、本作には不可思議な力で病を治すヒーラーの女性や、予言を行う者が登場し、ナッシングから引き継ぐマットと家そのものも超自然的な力を秘めている。それらに関しては、次章で言及するが、そういったカリブ海地域特有の文化的遺産のひとつともいえる精神世界の特性を巧みに作品に昇華させるブロードバーの文学的手腕は見事だといえるだろう。

3. ナッシングから「私」たちの世代へ引き継ぐもの

「私」が21歳の時に、ナッシングの遺産として彼女の広大な地所と屋敷、そしてあのマットを引き継ぐことになる。驚いたことに、リサーチの過程で、「私」が住むことになるその家と土地は、もともとサミュエル・ターンベリーのものであることが判明するのだ。サミュエルは、子供時代に男色家のイギリス人少佐の相手だったのではないかという説があり、また妻のドリスが出産の際に亡くなっていることから、女を排除しようという「呪われた家」(86) であると予言者から忠告されていたため、「私は、この女嫌いの場所をどうしていったらよいのか？」(72) と途方に暮れることになる。実際に朽ち果てたような古い屋敷に一人で住み始めると、子供の泣き声のような音が響き渡り、ビシッ、ビシッという大きな音が屋根のあたりから聞こえ始め、不安な夜を過ごすことになる。そんな時に彼女を守ってくれたのが、あのナッシングのマットである。「私」は頭からマットを被り、怯

えていると、「聖油」(80)を頭に注いでもらっているような感覚に陥る。また「私」から何かを奪おうとする者がいれば、その者に天罰が下るような不可思議な出来事が起こるのだ。やがて、「私のマットは全てを見抜き、全てを知り、懲罰を与えし偉大なる」(84)存在であることに気がつくことになる。

ただ、「私」にとって気がかりなのは、遠縁にあたるアメリカ人のジョイ (Joy) とそのお腹にいる赤ん坊である。ジョイは、「私」の祖母パールがアメリカ人男性との間に儲けた二人の子供のうちの一人、ジョン (John) の娘であり、アメリカで「黒人の政治運動にかなり本気で関わっている」(77) 大学教授である。「私」とは違って、ジョイはとても肌の色が薄い「貴族のような外見の女性」(87) だ。妊娠した彼女が、結婚せずに子供を産むことを希望したため、「私」を頼ってジャマイカにやってきたのだ。出生証明書には、「私」が母親ということで届け出、我が子を養子にするという方法でアメリカに連れ帰るという計画を実行するために、ジョイは「私」の屋敷で出産準備を始める。しかし「私」は内心、この「女嫌い」で「呪われた家」とされる場所が彼女の出産の差し障りにならないかと不安を抱えているのだ。その不安を解消するために、「私」はナッシングのマットをジョイに貸し与え、助産師と産婦人科医のジュニア (Junior) の協力を得て、出産に臨むことになる。このジュニアは、のちに「私」の夫になる人物である。不可思議なことに、妊娠しているはずのない「私」の腹部も妊娠しているかのように膨らみ始める。これは、ブロードバーの『マイアル』(Myal 1988) にも同様の、想像妊娠のエピソードがあるが、本作では、ジョイが出産する際に、予想外の出来事として双子の男女が生まれてくることになる。女の子はヨランダ (Yolande)、男の子はモディブ (Modibe) である。当初の予定通り、ジョイはヨランダを娘として連れ帰るが、「私」はモディブを自分の息子として育てることになる。「彼女と私は、ナッシングとパールの単なる繰り返しなのだ。その関係は姉妹ではないのだが」(95) と語られるように、ナッシングのマットに表出する「反復」と「回帰」のキーワードが再び、ジョイと「私」の関係性の中に再現されるのである。それは、彼女たちの親世代、「ジョンとサリーは、ポリーとハーバートと似通っていた」(95) と語られるように、幾たびと繰り返される。直接的な血縁関係ではない家族関係が、ジョイの双子の一人を「私」が引き取り、母になることによって、そのファミリー・ヒストリーの円環は、さらに広がりを見せるのである。またこの出産により、彼女の家は、「呪われた家」から、人々や子供が集う「コミュニティーセンターのような」(94)、まさに「社会的空間」(86)へと変貌を遂げる。

しかしながら、ジョイと「私」の良好であるかにみえた関係性にも亀裂が走る。それは、ジョイがナッシングのマットを独占して所有することを望んだからであり、双子の父親であるヴィクター (Victor) の人間性を許容できなかったからである。「私」は、彼を「白いゴキブリ」(a white cockroach) と呼び、毛嫌いのするのだ。彼の外見は黒人であっても、中身は白人のようであり、自分のことしか考えない利己主義者であるからだ。同じアフリカ系であっても他者を理解しようとしなないヴィクターに我慢がならないのである。このヴィクターと「私」の関係性は、アメリカとカリブ海地域間のアフロ系同士の関係性をあたかも暗示しているかのようであり、中間航路、奴隷制という歴史的経

験を共有しながらも互いに理解し得ない、連帯関係を結び得ない両国のアフロ系ディアスポラの現実を示していると考えられる。⁵

そういった中で、ジュニアと「私」は、自分たちの実の娘、クラリセ (Clarise) を儲ける。「私の娘は、尋常ではないほど恵まれた子供だ」(101) と語るほど美しく、聡明な少女である。そして、「クラリセもまた、どこかナッシングなのである」(102) と自分の娘の中にナッシングの存在を感じ取った時、「彼女の中で円環が完成した。つまり、終わりは始まりと結びついているのだ。始まりでさえも」(102) と「私」は啓示にも似たひらめきを得るのである。つまり、ナッシングから「私」へと引き継がれた円環は、再び、新たな円環 (クラリセ) へと結びつき、始まるのである。「あなたの終わりは、あなたの始まり」というあの言葉通りに。

最後にモディブへ語った「私」の言葉は、ブロードバー自身のメッセージ性を色濃く反映していると考えられる。

「モディブ、私たちはアフリカから世界のここにやってきた時、血縁関係としてやってきたわけではないわ。私たちは、すでに互いを知っていて、愛し合っている兄弟姉妹、母と父としてやってきたのではないのよ。私たちは、家族もなく、友人もいない、一人の人間として、見知らぬ土地の、見知らぬ者としてやってきたの、愛したり、愛されたりする必要がある全ての人間のように。家族がいない中で、私たちは見つけ出した誰でも愛したし、誰かが私たちに与えてくれた愛情を喜んだの。だから私たちは、愛したり、愛されたりする歴史があるのよ。私たちに血縁関係があるからではなくて、神が互いの方法で私たちをそう仕向けたのだから。私たちは保護し、敬い、そしてケアするためにお互いの中に何かを見出したの。マットにあるモードとクラリセ、そしてナッシングとあの全ての人たちは、私たちを愛し、私たちをケアし、そして私たちによって、愛され、ケアされたいのよ。彼らは、私たちの家族なの。あなたとクラリセが家族であるように」(103)

たとえ直接的な血縁関係がなくとも、自由を奪われし奴隷としての苦難の歴史を共に背負い、世界中に散在するアフリカ系ディアスポラの子孫たちを一つの大きな「家族」としてブロードバーは捉え、国境越えて、文化や慣習、ジェンダーの差異を超えて緩やかに繋がり合えるような理想をここに掲げていると思われる。壮大な理想であることは間違いない。ナッシングから「私」へ、そしてクラリセ、モディブたちが今後、ナッシングのマットを受け継ぎ、ファミリー・ヒストリーを次世代に語り継いでいくように、ブロードバーは、文学という表現形式を通じて、自分たちアフロ系が辿ってきた歴史を再構築し、新たなフラクタルな家族としてのかたち、アフリカ系ディアスポラとして繋がり合うことの重要性和その意義を示唆していると考えられる。ジャマイカのある一家族のファミリー・ヒストリーの円環は、どこまでも広く拡張しえるのである。レベッカ・ロンダーニ (Rebecca Romdhani) は、「アフリカ系カリビアンには、置き去りされて、捨てられたという歴史があるのかも

しれない」(3)と述べているが、ナッシングのマットには、繋がり得る手立てとともに、負の遺産を転換する力が託されているのである。

植民地主義の歴史を変えることはできない。しかしながら、黒人奴隷、その子孫たちの歴史を自分たちの言葉で、自分たちの視点から語り継ぐことは可能である。それは、他者(西欧)から押し付けられ、書き込まれた歴史ではない。ブロードバーは、文学という表現形式をとりながら、その語り継ごうとする確かな意思、ナラティヴの力を顕在化している。本作は、そういった彼女の独創的試みの現れであるといえるだろう。

注

- 1 ブロードバーは、解放奴隷の第二世代である高齢のジャマイカ人たちにインタビューを行なったとされる。
- 2 「私」の父親は法律の勉強をするために、叔母は、音楽の天賦の才能を極めるためにイギリスに移住した。しかし、黒人であるがゆえに、叔母はクラシック音楽で身を立てることができず、ジャズのような黒人音楽を連想させるもので音楽活動を続けている。「私」の母、ブリジット(Bridgit)は看護師であるが、出自のわからない「捨て子」という設定のため、作品中では、父方のルーツのみが語られることになる。
- 3 フランクリン・ナイト(Franklin W. Knight)によれば、モラントベイの反乱により「植民地総督のエア(Edward John Eyre)は、500人近くの農民の処刑、600人を容赦なく鞭打ちを命じ、1000軒の家屋が軍隊と、政府が法律的な協定を結んだ、元逃亡奴隷の子孫であるマルーンらによって焼き討ちされた」(283)とされる。小説の中にもDaddy Bとして反乱の指導者の一人であったバプティスト協会の牧師、Paul Bogleが登場している。
- 4 デリリップ・ヒロ(Dilip Hiro)によれば、カラーカースト制は、「White, fusty, musty, dusty, tea, coffee, cocoa, light-black, black, dark-black」というように肌の色合いによって細分化され、社会的地位・階級と強く結びついていた。
- 5 「私」とヴィクターは半目し合っているが、「私」の兄とヴィクターはそれぞれイギリスとアメリカで「白人女性と結婚した」ために罪に問われ、刑務所入りをした共通点がある。これも、一族間で起こる「反復」と「回帰」の一例だと考えられる。

参考文献

- Brodber, Erna. "Fiction in the Scientific Procedure." *Caribbean Women Writers: Essays from the First International Conference*. Ed. Selwyn R. Cudjoe. Massachusetts: Calaloux, 1990: 164-168.
- . *Louisiana*. London: New Beacon Books, 1994.
- . *Myal*. London: New Beacon Books, 1988.
- . *Nothing's Mat*. Jamaica: The University of the West Indies Press, 2014.
- Cooke, Mel. "Brodber Presents Nothing's Mat." *The Gleaner*. June 15, 2015.
- <<http://jamaica-gleaner.com/article/entertainment/20150615/brodber-presents-nothings-mat>>
- Danticat, Edwidge. "The real worlds." *PEN America 6: Metamorphoses*,
- <www.pen.org/viewmedia.php/prmMID/151/p4mID/1375>

Hiro, Dilip. *Black British, White British*. Middlesex and Victoria : Penguin Books, 1973.

Knight, Franklin W. *The Caribbean : The Genesis of a Fragmented Nationalism*. New York : Oxford University Press, 1990.

Mordecai, Rachel L. "Toward a conference paper on_Nothing's Mat_" September 9, 2016.

<http://blogs.umass.edu/mordecai/2016/09/09/toward-a-conference-paperpon_nothings-mat_>

Romdhani, Rebecca. "Patterns of Loving." *Small Axe Project*. Feb, 2016.

<<http://smallaxe.net/sxsalon/reviews/patterns-loving>>

Rowell, Charles H. "An Interview with Olive Senior." *Callaloo* 36 (Summer) 1988 : 480-90.

University of Richmond. "Erna Brodber : Celebrated Jamaican author spends semester at Richmond." *Newsroom*. October 30,

2009. <<http://news.richmond.edu/features/article/-/185/erna-brodber-ce...s-semester-at-richmond.html?sma=sm.00005rpu9u2uxfe2v7c1boes3j99m>>

Yale University. "Erna Brodber." *Windham Campbell Prizes*.

<<http://windhamcampbell.org/2017/winner/erna-brodber>>

*本研究は、JBPS 科研費 16K02509 の助成を受けたものです。

【Abstract】

Weaving Colonialism into a Caribbean Family History: An Essay on Erna Brodber's *Nothing's Mat* (2014)

Yuka IWASE*

In this essay, which focuses on Erna Brodber's latest novel, *Nothing's Mat* (2014), I examine how the author reconstructs the legacy of colonialism in the Caribbean and weaves it into a Jamaican family history. Brodber is renowned as an Afro-Jamaican novelist, sociologist, and activist. By her unique literary method, Brodber successfully describes in *Nothing's Mat* a "fractal" family history rather than describing a family history through linear genealogies that rely on neutral and fact-based archives. She attempts to find the epitome of colonialism in Nothing's narrative history and to improve solidarity among the black diaspora over blood relationships.

Key words : Anglophone Caribbean Literature, Erna Brodber, Postcolonialism, Gender Studies, Family History

アフリカ系ジャマイカ人作家であり、社会学者としても知られるアーナ・ブロードバーの最新小説『ナッシングのマット』(2014)を中心に、あるジャマイカ人一家のファミリー・ヒストリーを通じて、ポストコロニアルの現代から、いかにブロードバー独自の文学的手法で植民地主義支配の歴史を再構築し得るのかについて論じた。

まず、客観性や論理性を重要視する西欧アカデミズムとは異なる、ブロードバーが「小説と科学の結合」(167)と呼ぶ、独創的な文学的アプローチ法について言及しながら、直線と矢印からなる一般的な家系図では示すことのできない、ナッシングの語る「フラクタルな」ファミリー・ヒストリーの詳細について分析した。

最終的に、ブロードバーは、奴隷制、植民地主義支配という苦難の歴史を共通項としてもつアフリカ系ディアスポラが歴史を再認識して連携し合うことの重要性とその意義を「新たなフラクタルな家族のかたち」の中に見出していると考えられると結論づけた。

キーワード：カリブ海地域の文学、アーナ・ブロードバー、ポストコロニアリズム、ジェンダー研究、ファミリー・ヒストリー

* An associate professor in the Faculty of Sociology, and a research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University